

〔博士論文要旨〕

## 戦間期における日洪文化交流の史的展開

近 藤 正 憲

### はじめに

本稿においては戦間期を中心に日本とハンガリーとの文化交流を考察の対象とし、両国国民の相互認識と、日本にとって初めての対外的文化協定である日洪文化協定によって法的に位置づけられた文化交流の実際と問題点を明らかにすることを目的とする。ハンガリーと日本との文化交流の歴史は日本人にとって馴染みの薄い文化圏に属する国々との文化的交流全般を考える上でも、国家の手による文化交流を考える上でも示唆に富むものである。

### 第一章

19世紀から第一次世界大戦までの時期における両国の文化交流の特徴を考えると以下のことが言える。

ハンガリー側の対日認識は東アジアや日本に対する興味関心から出発したものであり、この点では西欧諸国と同様である。ハンガリー人一般の対日認識は概して好意的なもので、日本という未知の国のエキゾチックな文化に対する興味関心から醸成されていったと考えられる。その情報源の多くは他のヨーロッパ諸国における日本研究の成果と旅行者の見聞の情報によっていたが、1880年代以降ハンガリー人の直接の情報も入るようになった。

19世紀の後半のハンガリー人は自らが属するヨーロッパ文化とは全く異なるエキゾチックな別世界の人々として日本人を認識しており、この認識

が、「ヨーロッパ的価値観の上で好ましい近代化を進める日本」という認識に大きく変更されるのは1890年代以降である。

日露戦争の勝利によってハンガリー人にとっての対日認識には、上記二種類の対日認識の他にロシアと戦い、勝利を収めた「強国としての日本」という権力政治的対日認識が加わることになる。またこの認識は日本は少数の知識人のみならず、ハンガリー社会の広い層に広がった。

以上を纏めると第一次世界大戦以前の時期にハンガリー人は日本に対して次のような認識を持っていたといえることができる。すなわち①エキゾチックな異文化世界としてのもの、②躍進する近代国家としてのもの、③ロシアを打ち破った強国としてのもの、の三つである。これらは時代的に継起し、現れたのである。

以上のようなハンガリー人の対日認識と比べると、同時代の日本人の対ハンガリー認識はかなり対照的である。ハンガリーを含めた東欧に対して日本人が持った認識は主として政治的な興味関心であった。久米邦武『米欧回覧実記』の中で描かれたハンガリーは日本と共通する面を多く持つ遅れた小国としてのものであり、東海散士『佳人の奇遇』の中で描かれたハンガリーは同じ弱小民族の一つとして列強と対決するために同盟を結ぶ相手、政治的提携の相手であった。

この背景には19世紀後半において日本人は自国の植民地化の恐れを常に根底に持っていたことが考えられる。対外的な興味関心といえ、文化的な興味関心は殆どなく、政治・経済的な関心が主であった。換言すれば日本人は他のヨーロッパ列強に対してと同様に一貫してハンガリーを政治的に見ていたのであり、文化的な関心は無視し得るほど小さく、全く副次的なものであったといえることができる。これは両国の置かれた政治的な状況の格差をそのまま反映しているといえるのである。

20世紀に入って日本はアジアの小国から覇権を争う軍事大国となり、ハンガリーは第一次世界大戦の結果、ヨーロッパの大帝国の支配的地位を与えられた民族から周囲を敵対的な国に囲まれた小国へと転落する。日本人にとっての東欧は、敵であるロシアの背面としての政治的価値のみが注目され、一般にはその関心が低下していったのである。

一方ハンガリーでは19世紀後半を通じて醸成された対日認識がツラニズムという特殊な人種論的民族主義運動に包摂され、日本との提携を模索する政策へとつながっている。このプロセスは、政治的関心に支配され続けた日洪両国民の相互認識の反映とすることができる。

## 第二章

第一次世界大戦後における日本人とハンガリー人の相互認識は一般にハンガリー側が日本に対して強い興味を持っていたのに対して、日本側は、外交官や情報将校を除けばあまり強い関心を持っていなかったと考えられる。そして両者に共通していたことは、主として権力政治的関心が相互認識の中心となっていたことである。そしてこの時期においてハンガリーの対日認識に大きな影響を与えたのが前述のツラニズムであった。ツラニズムはウラル・アルタイ系諸民族の血縁関係を認め、これを根拠として政治的な連合を求める思想・運動であり、戦間期のハンガリーで大変盛んになった。この思想においては日本人とハンガリー人は「兄弟民族」とされ、共にスラヴ民族との対抗を運命付られたものとして位置づけられた。

ツラニズムの代表的組織であるツラン協会は閉鎖的な都市知識人の集団であり、大衆運動としては全く力持っていなかったが、保守的な貴族グループを中心とする政治的特権階層に隠然とした影響力をもち政治的圧力団体として機能し、日本との関係においては独占的な地位を確保した。ハンガリーにおけるツラニズム運動の進展と満州事変以来の日本の外交的孤立化を背景として、三井高陽の寄付が行なわれた。

三井は他人には真似のできない質的に高い学術的な文花交流を志向し、「国策」に協力する意図を持って1930年代前半から東欧諸国の学術団体に対して寄付活動を行っていた。そしてハンガリーに対しても文部省と洪日協会に多額の寄付を申し出るのである。

三井の寄付はハンガリー側のツラニズム的な日本へのアプローチを更に強いものにし、彼の寄付を契機として日洪文化協定の締結交渉が始まるのである。

### 第三章

第一次世界大戦以降、ヨーロッパ諸国間で締結された文化協定は政治的、学術的に高いレベルの人的交流を制度的に維持する機能を持っていた。そしてその目的は政治的提携関係を補完することであったと考えられる。

ハンガリーにおいては1930年代中葉から周辺諸国との間に文化協定を締結する動きが見られ、それはハンガリー国内政治の権力バランスの変数ちすて理解することができる。日洪文化協定締結交渉の開始も、ゲンベシュ政権のもとで対独傾斜をふかめたハンガリー外交を矯正しようとした保守的貴族層の巻き返しという意味合いで理解することができる。そして、その契機になたのは三井高陽の寄付であった。

一方日本側の動機は満州事変以来の孤立状態を打破する一つの方策として、また「露国情報」収集の方便として文化協定を利用することであった。日本の外務省の一部には、日洪文化協定を政治とは分離した形式で締結するべきであるとする意見もあったが、結局政治色の強い条文が採択されることとなった。その結果、日洪文化協定は政治的な提携関係を明確に示す政治的協定として外国に認識されるにいたる。

日洪文化協定の条文は非常に簡素な条文が採用された。その理由は枢密院での審議のとおりやすさ、他国との文化協定のモデルとする必要性などがあった。総じて言うなら、日洪文化協定は一つの実験であった。同協定は締結することによる実際の文化交流よりも締結そのもの期待されたものであったと考えられる。

### 第四章

日洪文化協定は実際の運用上、日本側により多くの資金提供をさせる性質のものであった。その資金は日本側の複数の機関による負担によって成り立っていた。日本側での文化協定政策の発案者である外務省は官制改変の影響で文化協定の運営においてまったくの脇役に追いやられてしまうことになった。主たる出資者の一元的なコントロールのないまま日洪文化協

定に基づく文化事業は行われていった。

日本における日洪文化協定の実施においては、文化交流の意思決定機関としての日洪文化連絡協議会と、文化事業実施機関としての日洪文化協会に注目する必要がある。前者は政治的な情報収集の場としての一定の機能を持った一方、相手国及び国内諸機関の利害調整の機能を果たした。後者は外務省と三井高陽の協力を基礎に国策としての日洪文化交流を国内で実現するための機関であった。日洪文化協会はいわゆる文化団体ではなく人事面から見ても財政面から見ても国策を遂行するための特殊法人であった。そしてその国策とは日独伊三国同盟とハンガリーの対独従属を前提として、ソ連と対立する反共ブロックの維持発展であり、そのための世論形成であった。

日本、ハンガリー両国の文化交流は「三国同盟」と「共通の敵ソ連への対抗」という枠組みから抜け出すことはできなかった。戦争激化は交通の阻害と資金難を両国の交流にもたらした。ここに至って両国の文化交流は急速な縮小の道をたどり、国交断絶とともに途絶してしまった。このように戦間期における両国の文化交流は一貫して政治的利害に左右されつづけたのである。

## 終 章

戦後、両国は東西冷戦のもとでそれぞれの陣営に組み込まれることとなり、旧体制のもとで庇護を受けた文化交流の主体は解体され、その成果も否定された。両国の文化交流の歴史は第二次世界大戦の終結を境に全く断絶しているといわざるを得ない。ここにおいても政治に従属した両国文化交流の姿が明らかになる。

政治運動に深く結びついた文化交流は国家体制や権力者の交代によって大きな変更や途絶を余儀なくされ、しかもその回復は必要以上に時間のかかる仕事になる。戦間期における日本とハンガリーの文化交流は、政治運動に深い結びつきを持つ文化交流の大きな限界を明確に示す一例として位置づけることができる。私たちはその歴史を改めて直視し、この中から教

訓を得るべきである。そしてその教訓とは、戦間期における両国の文化交流が政治的目的に従属させられたが故に、その内容を貧しいものにし、その上政治的目的の破綻によってその政治的目的以上の大きな被害を受けた例であるということを知ることであると筆者は考える。

(1999年9月取得、学術)